

## モーゼス・マイモニデスの生涯 (下)

泉 彪之助

### 八．イスラム世界におけるユダヤ人

イスラム教は、ユダヤ教、キリスト教の影響を受けて成立した宗教である。またイスラム教がコーランを信仰の基本におくのに対して、ユダヤ教、キリスト教は旧約聖書、新約聖書を根本経典としている。そのためイスラム教は、ユダヤ教およびキリスト教を、唯一神を信仰し基本的経典を持つという点でイスラム教と共通のものであるとし、「啓典の民」としてこれを受け入れた。<sup>(46)</sup> 啓典とは、唯一至高の神の啓示を記した書の意味である。

イスラム教にジンミー（被保護民）という制度がある。「啓典の民」である異教徒に対し、一定の人頭税を課すること有条件に、信仰の自由と、宗教的指導者の宗教問題についての決定権、ときにはイスラム教徒が関与しない問題についての世俗的決定権を認めるものである。その対象となったのは、ユダヤ教、キリスト教、サービー教で、後にゾロアスター教、マニ教も含まれた。<sup>(49)</sup>

イスラム教は本来、他宗教に対して寛容であった。しかしイスラム教における宗教的寛容がいつも同じであったわけではない。イスラム教には、シーア派とスンニ派の根本的対立があり、その他にも時代・教派・政治権力の変化によつ

て種々の立場が現れた。一般に他宗教に寛大であったイスラム教にも、時にはムワツヒド朝のように、異教の信者に改宗を迫るものがあつた。

イスラム教徒支配下のユダヤ人にも種々の影響がおよび、マイモニデスがコルドバを去つたがカイロに安住の地を得たのもその例である。<sup>(1)(2)(26)</sup>

## 九．コルドバとマイモニデス

七一一年のイスラム教徒進攻に続く八百年のイスラム・スペインの時代、とくに七五六年に樹立された後ウマイヤ朝の寛容な政策の下で、スペインはイスラム世界の中でも特筆される文化興隆を来した。またその中で、ユダヤ人は政治・文化・経済の重要な役割を果たした。スペインは、ヨーロッパよりはるかに高い水準にあつたアラブ文化と、アラブ人によつて保存されていたギリシャ文化をヨーロッパに伝える窓口となり、その中心が首都コルドバであつた。<sup>(6)</sup> フリーデンウオードは、アルブカシス、アベロエス、マイモニデスらの医学者がコルドバに生まれ、コルドバが「哲学者たちの母」とか「アンダルシアの光」と呼ばれたことを紹介している。<sup>(21)</sup> 同じコルドバ出身でも、アラブ外科医学者アルブカシス(九三六ごろ—一〇二三ごろ)は、年代が違つたためかマイモニデスとの関係は記録されていない。

しかしレコンキスタが進み、アラブ人の勢力が衰えると、コルドバの繁栄にかげりが生じた。一〇八五年、アルフォンソ六世がトレドを奪還して、そこにアラビア語文献を組織的に翻訳する「翻訳工場」<sup>(19)(27)</sup>が作られるなど、イスラム教徒支配下、キリスト教徒支配下を通じて、コルドバに代わつてトレドが文化の中心となつた。一方イスラム支配者の間に起つた権力闘争は、コルドバの没落に拍車をかけた。マイモニデスや前述のアラブ医学者が生まれたのは、実はこうした残光の時代のコルドバである。<sup>(21)</sup>

後にカトリック両王はイベリア半島からユダヤ人を追放するが、レコンキスタの過程では、キリスト教徒はユダヤ人

を積極的に受け入れた。ムラビト朝、ムワツヒド朝の宗教的不寛容が明らかとなると、ユダヤ人はそれを避けて北上し、キリスト教徒支配下へ逃れた。<sup>(47)</sup> マイモニデス一家が南方へ逃れたのは、むしろ少数派であった。<sup>(47)</sup>

## 十・モロッコとアラブ医学

後ウマイヤ朝の繁栄を中心として、イスラム・スペインがアラブ文化の重要な土地となったことは、先にのべた通りである。しかし詳しく見ると、スペインとくに南スペイン・アンダルシア地方と、北西アフリカは、ほとんど一体となつて文化圏を形成した。<sup>(78)</sup> 以下、現在の国名で地域を表現する。

北西アフリカは、フェニキア、カルタゴ、ローマ帝国、バンダル族、ビザンチンの支配を受け、七世紀にイスラム教徒が侵入して、チュニジアのカイラワンに都を置いた。その勢力はさらに西へ進んでモロッコも支配し、イスラム軍がイベリア半島へ侵入したときも、この土地の種族ベルベル人が主力を占めた。イスラム時代には、モロッコ、アルジェリア、チュニジアを含む地域がマグレブ（西方の土地）と呼ばれた。<sup>(49)</sup>

八世紀にモロッコ最初の王朝イドリス朝が生まれ、ファーティマ朝、後ウマイヤ朝の支配を経て、ベルベル人の王朝ムラビト朝が起り、ムワツヒド朝に続いた。<sup>(48)</sup> <sup>(49)</sup> ムラビト朝、ムワツヒド朝の都はマラケシュであったが、次のマリーン朝がふたたびフェズを都とし、フェズが北西アフリカにおける文化の中心といわれたのは先にのべた通りである。この地方の重要性は、サレルノの医学校および修道院医学に大きな貢献をしたコンスタンチヌス・アフリカヌスが、マグレブ（チュニジア）出身という説がある（シチリアともいわれる）ことなどからも認められよう。

アラブ医学後期の医学者たちにも、アペロエスのように経歴上モロッコと関係が深いものが多く、アラブ医学者の中にはモロッコの宮廷の勢力争いから毒殺されたものまでいる。このようなアラブ医学とモロッコあるいはマグレブ地方との関係は従来あまり注目されなかつたところであり、今後検討を要しよう。

## 十一．アラブ医学とユダヤ人医師

アラブ医学がビザンチン医学やペルシヤ医学に影響されて発達し、独自の医学を形成したことは知られる通りである。フリーデンウオードは、アラブ医学の功績を、単にギリシヤ医学の保存と西ヨーロッパへの伝達だけでなく、いくつかの病気の発見、新しい重要な薬物の発見、医学校、医学図書館、病院の設立等によって新しい医学の発展に貢献したと<sup>(21)</sup>している。

いわゆるサラセン帝国の拡大によって、アラブ文化は、アラビア半島の住民だけでなく、ペルシヤ人、エジプト人、トルコ人、ベルベル人、ユダヤ人らを含む地域にひろがった。またイスラム教の他宗教に対する寛容によって、宗教的にもイスラム教徒、ユダヤ教徒、ローマ教会を除くキリスト教徒が参加した複合文化として成立した。<sup>(49)</sup>

後ウマイヤ朝の成立以後、アラブ文化の中心が東西両方に分かれ、バグダッドにおける政治的混乱もあって、スペインおよび北西アフリカ・マグレブ地方が文化的に高い水準を示すようになった。後期の著名なアラブ医学者も、ペルシヤ出身のアビケンナを除くと、多くがスペインおよびマグレブで活躍している。ユダヤ人医師はアラブ医学の興隆に貢献したが、それは西方イスラム社会でとくに顕著であつた。<sup>(6)(65)</sup>マイモニデスは、こうした潮流の中で出現したと考えるべきであろう。

ヨーロッパを中心として中世医学を記述しているシッパージェス、川喜田<sup>(52)</sup>も、ユダヤ人医師の貢献を認めている。イスラム世界だけでなく、中世においてユダヤ人医師は一種の職業集団として活躍した。諸国の宮廷医師にユダヤ人が多いのも、その現れである。<sup>(3)</sup>マイモニデスがリチャード獅子心王に招かれたのも、そうした傾向の一面といえよう。

ユダヤ人に対する迫害はキリスト教の初期教父時代から始まっているが、民衆の暴力行為として現れたのは、第一次十字軍の途上、ライン地方の諸都市における暴行・殺害である。それは獅子心王がパレスチナへ来る約百年前のことで

あつたが、そうした風潮にもかかわらずマイモニデスを招こうとしたのは、ユダヤ人医師に対する信頼の厚さを示すものである。

## 十二．ユダヤ教、イスラム教における医師の地位

ローマ帝国、その後の中世キリスト教世界において、医師の社会的地位は決して高いものではなかった。これと異なり、ユダヤ人の間やイスラム社会では医学が高く評価され、指導者層の教養・職業とされた。マイモニデスが一般教養の一部として医学を学んだという説のあることは先にのべたが、ユダヤ人は指導者あるいは知識層が教養として医学を<sup>2</sup><sub>3</sub><sup>6</sup><sub>29</sub>学び、そうした人々はしばしば医師を職業とした。

ムハンマド（マホメット）は、伝承の中で「学問に二学ある。教えの学と、身体の学と」とのべ、学問を二つのもの、すなわち神学と医学からなるとした。<sup>64</sup><sup>80</sup>前嶋信次は、「（イスラム社会で、医学は）哲学などとともに最も愛重された学問であつた」と書いている。<sup>64</sup>ラーゼス、アビケンナ、アペロエスらのアラブ医学史上有名な医師が思想上も大きな貢献をしたことは、（前嶋は人体を小宇宙としてとらえるアラブ医学の性格によるとするが）<sup>64</sup>イスラム社会で医学がしばしば最高の知性人によって学ばれ、実践されたことを示している。このことが、アラブ医学が高い水準を達成した理由の一つと考えられる。医学の高い評価は、商人としての経験があり、現実生活に鋭い感覚を持っていたムハンマドの見識によるものである。ムハンマド自身、かなりの医学知識を持っていたといわれる。<sup>64</sup>

マイモニデスが、まれに見る多面的な能力を持った知性人であり、中世最高の学者の一人であつたことは明らかである。しかしその高い業績には、このようなユダヤ社会、イスラム社会の性格も影響していよう。

### 十三・マイモニデスの業績とヘブライ語、アラビア語、ラテン語

マイモニデスの医学的著作がアラビア語で書かれたことについて、「アラビア語が、当時の医学・科学における共通語であった」と説明されている。<sup>(6)(31)</sup>しかしそれだけでは、マイモニデスがアラビア語を書くのにヘブライ文字を使用し、その業績がヘブライ語、ラテン語にも翻訳された理由を説明できない。

ユダヤ人の民族語ヘブライ語は、日常語としては早くからアラム語に地位を譲った。旧約聖書はヘブライ語で書かれているが、一部にアラム語が含まれている。イエス・キリストが話していたのは、アラム語であるとされる。ヘブライ語は宗教用語、文章語として使用され、イスラム社会のユダヤ人コミュニティでもヘブライ語は話されなくなった。現在イスラエルで使用されているヘブライ語は、十九世紀にエリエゼル・ベン・イエフダによって人為的に復活された言語である。<sup>(81)</sup>

元来離散ユダヤ人は、ユダヤ人としての民族的伝統を保持すると共に周囲の他民族と協調して生活しなければならぬ立場から、複数言語を使用する生活であった。宗教用語としてのヘブライ語は別として、イスラム社会のユダヤ人にはアラビア語が生活用語となり、ユダヤ文学もアラビア語によるものが主流となった。ユダヤ人が使用するアラビア語はヘブライ文字で書かれるのが普通で、ユダヤ・アラビア語 (Judeo-Arabic) と呼ばれた。<sup>(5)(71)</sup>イスラム社会のユダヤ人の宗教的・哲学的著述でヘブライ語で書かれたものは多くあったが、医学的著述で原文がヘブライ語であったものは一つもなかった。<sup>(65)</sup>

イスラム教信仰の中心であるコーランは、アラビア語で書かれている。このことから、アラビア語はイスラム社会で特別な重要性を持った。コーランを、公認されたトルコ語以外の言語に訳することも許されず、現実に存在する各国語訳はコーラン理解のための参考過ぎないとされる。<sup>(76)</sup>

イスラム世界の拡大に従って、イスラム教はアラビア語を母語としない民族にも広がったが、その結果コーランの読み方に多様性を生じた。これを統一するため、アラビア語を標準化する努力がなされ、またコーランの正確な読み方と解釈を教えることがイスラム教布教の重要な手段となった。<sup>(49)</sup>このために作られたのがマドラサ(学院)で、礼拝のための施設マスジド(モスク、イスラム教寺院)と共に基本的な宗教施設となった。マドラサでは、コーランの解釈学、イスラム法学などのイスラム諸学と共に、医学、哲学、数学、地理学、化学、天文学なども教えられた。<sup>(26)(61)</sup>

イスラム教とユダヤ教が、ローマ教会の教皇至上・無謬論のような権威主義によらず、聖典の理解のための教育・学習を重視し、とくにイスラム教が宗教施設で医学や自然科学を教育するような方針を取ったことが、両教徒が中世に高い文化を生み出した原因の一つであろうと思われる。

このようにアラビア語はイスラム社会の統一性を支える重要な武器となったが、全地域的な標準化は日常語としてはかえって不便で、そのためアラビア語は、文章語・固い会話語としての正則語(標準アラビア語、フスハー)と、各地方で用いられる話し言葉としての方言(アンミーヤ)との二つに分かれた。<sup>(82)</sup>マイモニデスが使用したユダヤ・アラビア語は、この方言の一種と考えることもできる。

もつともイスラム社会以外の地域を含むユダヤ人の間では、ヘブライ語は共通語としてなお重要であった。マイモニデスは、イブン・ティボンがラビを勤めるフランス・リュネルのユダヤ人コミュニティから、『迷える人々への導き』<sup>(1)(2)</sup>をヘブライ語に訳することを求められ、多忙とイブン・ティボンがすでに翻訳を進めていることを理由に断っている。この訳は、イブン・ティボンによつて完成された(注4)。マイモニデスの医学的業績がヘブライ語に訳されたのは、こうした事情から来ている。<sup>(65)</sup>

このころいわゆる十二世紀ルネッサンス(Haskins、伊<sup>(83)</sup>)において、アラブ文化がヨーロッパへ組織的に輸入されたが、マイモニデスの著作がラテン語に翻訳されたのはその一環である。

#### 十四・マイモニデスの評価

ある研究者は、医学史上のマイモニデスの地位に関して、「マイモニデスは、ユダヤ人、アラブ人の双方にとって誇りである」とした。<sup>(13)</sup> マイモニデスは、ユダヤ医学史の巨峯の一人であると共に、アラブ医学史上の重要人物である。<sup>(1)</sup> しかし現在はユダヤ人側からの研究が多く、そのことを反映して高く評価する論文が多い。しかし真にマイモニデスの医学的業績を評価するには、マイモニデスだけを取り上げるのではなく、アラブ医学史の流れの中でマイモニデスを考えるべきであろう。これらは、今後の課題としたい。

同時代史料を参照した初期の研究は、比較的客観的に見ている。ルクレールは、マイモニデスの臨床的技能について「実際家であるより学者であった」とし、最高の知性だが二流の医師ときびしい評価をしている。<sup>(18)</sup> しかし一方で『モーゼス・マイモニデスの医学箴言集』は独創性に欠け、ヒポクラテス、ガレノスからの資料以上のものでないが、翻訳されれば印刷されて、ヒポクラテスの著書同様に有益であったと公平にのべている。<sup>(18)</sup>

マイモニデスの同時代人 Abd al-Latif (一六二—一三三)、バグダッドの医師でエジプトを訪問した)はマイモニデスを、「優れた人物だが、何事にも一位になりたがり、権力者に近付きたがる」と評している。<sup>(18)(21)</sup> ただし著者(泉)は、フリーデンウオードと同じく、この見解に同意しない。

W・オスラーは、一九一四年四月二十七日、ロンドンのイングランド・ユダヤ人歴史協会の第二十一回創立記念日に、ユダヤ医学史の講演をした。<sup>(84)(85)</sup>

オスラーがマイモニデスについて言った言葉として、先にのべた“Prince of Physicians”がよく引用されるが、この講演の表現はやや異なっている。以下原文を引用する。

(東西イスラム世界および北アフリカにおける優れたユダヤ医学者として、イサク・ユダエウス(注6)とラビ・ベン・エズラ(注





マイモニデスの墓碑銘  
(最上段の文章が本文に引用した頌詞)

7) を挙げた後) “But the prince among Jewish physicians, whose fame as such has been overshadowed by his reputation as a Talmudist, and philosopher, is the Doctor Perplexicorum: dux, director, demonstrator, neutroium *dubitanium et errantium*-Moses Maimonides . . .” (Doctor Perplexicorum は『迷える人々への導き』のラテン語訳名。ヘブライ語訳名でも、最初の語が教師の意味も持つところから、この Doctor をマイモニデス自身にかけている)。講演の対象がユダヤ人団体なので、儀礼的な意味も含めてマイモニデスを称賛しているが、オスラーがマイモニデスを評価していることは認められよう。

フランクは、マイモニデスの業績に独創性がないと言い、医学においても宗教においてもマイモニデスはラビ(教師)であって預言者ではなかったと、きびしく評価した<sup>(3)</sup>。ユダヤ教におけるマイモニデスの影響の大きさ、対立するものの中にユダヤ神秘主義カバラを生み、六百年の後にユダヤ啓蒙主義を生み出す原動力となったことを見ると、宗教において教師に過ぎなかったとするのは明らかに不当である。しかしフランクがマイモニデスを、その時代相において評価し、時代を象徴するものとして捕えようとしていることは理解できる。

ユダヤ人のマイモニデスへの高い評価を示す、「旧約聖書の」モーゼからモーゼ(マイモニデス)までの間に、モーゼのような(偉大な)ものはいなかった」という言葉がある。マイモニデスの墓碑銘にも、この言葉が書かれている。その写真と、発音、逐語英訳を示す。(表記の基本は前稿参照)<sup>(38)</sup>。ここでは表記法を少し変更し、ヘブライ文字をローマ字の大文字で、母音記号ニクダーは小文字で、発音されない文字は括弧つきの大文字で示した。ヘブライ文字アレフ、アインの音は特殊な子音で、これにあたるローマ字がないのでA、Eで表記した。ニクダーは墓碑銘には書かれていない)

MIMoShē(H) (E)ad MoShē(H) Lo(A) KaM KeMoShē(H) (右→左)

(from-Moses till Moses not has-risen like-Moses)

(ヘブライ語の前置詞は、しばしば修飾する名詞と結合して名詞前綴の形をとる。Mr. Keはこのような前置詞)

### 謝辞

この研究に種々の援助を与えられた福井県立病院図書館 前田範子司書、文献収集に協力いただいた大井書店に謝意を表す。

(この論文の要旨は、平成九年十月第九八回日本医史学会総会で発表した)

### 注

注1・アラブ人には姓がなく、名前は次のような要素から成っている。

(1) 本人の名前、(2) 父の名前、(3) 祖父の名前、(4) 部族の名前、職業名または出生地名(アラブ医学者の場合は、これよりさらに複雑である)<sup>(17)</sup>。現在は、これを(1)(2)(4)、(1)(2)、または(1)(4)として使用する場合が多い<sup>(82)</sup>。

アラブ医学者の名は、多くibn〜という形で(2)あるいは(4)が示される。しかしイブン・テイボンの例が示すように、複数の人物が同じように表記され、混同されることがある。ビュステンフェルトは、ibn Zohr (ibn Zuhri) という名を持つアラブ医学者六名を挙げている<sup>(17)</sup>。これはアラブ医学者の場合、家系名が一種の職業上の称号として用いられることがあるからである。そのため本稿ではなるべくフルネームを記載し、また文献によって表記が異なるので複数文献を引用した。

主要なアラブ医学者はラテン名があるが、全部ではなく、またibn Zuhriのように、ラテン名がありながらよくアラブ名で呼ばれる人もある。

注2・ユダヤ暦年から三七六〇年を引くと西暦年になる。ニサン(Nisan)月、イヤール(Iyyar)月、シヴァン(Sivan)月、(マル)ヘシヴアン(Chesvan)月、テヴェット(Tevet)月は、それぞれ古代イスラエル暦第一月、第二月、第三月、第八月、第

十月のバビロニア名で、西暦の三〜四月、四〜五月、五〜六月、十〜十一月、十二〜一月ごろになる。またその後改訂されたユダヤ暦法で、第七月ティシユリ (Tishri) 月 (西暦九〜十月) が正月とされた。<sup>(67)(68)(69)(70)(71)(72)(73)</sup>

注3 Joseph Hasdai ibn Shaprut (九一五—九七〇)。ユダヤ人医師・政治家。アンダルシアに生まれ、コルドバで医業に従事、同地で死去。カリフ・アブドゥル・ラフマン三世に医師・政治家として仕え、コルドバの文化・医学の興隆に大きな功績を残した。医学では、Dioscoridesのアラビア語への翻訳者として知られる。<sup>(16)(65)</sup>

注4 イブン・ティボンについて注意すべきことは、三代にわたる翻訳者の家で、いずれもイブン・ティボンと呼ばれることである。

この三代は 'Judah (Jehudah) ben Saul ibn Tibbon (一一二〇—一九〇)' Samuel ben Judah ibn Tibbon (一一六〇—一二三〇)' Moses ben Samuel ibn Tibbon (生没年不詳、活動期一二四〇—一八三) <sup>(51)(65)</sup>である。初代ユダ・イブン・ティボンは、「ユダヤ人翻訳者の父」(Father of Jewish translators) といわれた人で、医師であると共に、アラビア語文献のヘブライ語への翻訳者として画期的な業績を上げた。<sup>(63)</sup>しかしユダは『迷える人々への導き』が書かれた一一九〇年に死去しており、この書を翻訳したのは二代のサムエルである。また三代のモーゼスは、マイモニデスの『健康の保ち方』、『毒物と解毒剤』等の論文を訳した。フリーデントウオードのユダヤ医学史蔵書目録に、マイモニデスの Jehudah ibn Tibbon 宛の手紙が挙げられており、その文献頁は論文中で「フスタートの生活についてのイブン・ティボン宛書簡」<sup>(41)</sup>の脚注に書かれたものと一致する。一方でフリーデントウオードは、この手紙が書かれたのはユダがすでに死去している一一九九年と論文に明記している。<sup>(21)</sup>この矛盾の理由は不明である。『迷える人々への導き』を訳したフリードレンダーを含め多くの著者は、「フスタートの生活についてのイブン・ティボン宛書簡」の宛て先をサムエル・イブン・ティボンとして<sup>(1)(2)(7)(16)(28)</sup>いる。

注5 Hibbet Allah ibn al Jami, or Ibn Junay. サラディンの侍医であった十二世紀の有名なユダヤ人医師。トゥデラのベンヤミンが、カイロのユダヤ人指導者として名を挙げている。主著『精神と肉体を健全にするための指示』(A Guide for the Soul and Body) を始め、いくつかの著書がある。<sup>(16)(49)</sup>

注6 Isaac Judeaus, Isaac ben Solomon Israeli, Abu Ya'kub Ishak ibn Sulaiman al Israeli。ハラブ人には Israeli or Israeli

として知られる(八三二〜五〇一九三二〜五〇)<sup>(16)</sup>。ユダヤ人医師。カイロに生まれ、バグダッドで医学を学び、北アフリカで活躍。カイロで眼科医。カイラワンでカリフの侍医となり、種々の医学的著述を残し、同地で死去。アビケンナは、その著書「カノン」に Israeli の叙述をいくつか引用している。コンスタンチヌス・マフリカヌスは、Israeli の著書をラテン訳した。<sup>(16)</sup> (カガンは上のカイラワンを Kairwan, Egypt と書つてゐるが、<sup>(16)</sup> 当時エジプトの支配下にあつたとはいえ、地理的には現在のチュニジア、つまりマグリブに属す<sup>(16)</sup>)

注7・Rabbi ben Ezra, Abraham ben Meir ibn Ezra(一〇九〇〜九二二一六四〜六七)。ユダヤ人医師・数学者・天文学者。スペインのトレドで生まれ、ローマ、ロンドン、ナルボンヌなどヨーロッパ各地を遍歴、スペインのカラボラで死去。翻訳家であると共に、天文学、医学などの論文を書いた。諸国を遍歴中に、ギリシャ科学を各地に伝えた<sup>(16)</sup>とされる。

#### 参考文献

- (1) Blockstein, W. L.: Moses Maimonides; a review of his life and contribution to medicine. *Am. J. Pharm.*, 126: 238-244, 1954
- (2) Friedländer, M.: The Life of Moses Maimonides. xv-xxv *in Ref.* (12)
- (3) Franck, J. B.: Moses Maimonides: Rabbi of Medicine. *Yale J. Biol. Med.*, 54: 79-88, 1981
- (4) 板垣雄三監修、長沼宗昭訳「カイロ・ゼニーザ」『ジュナイッシュ・ワールド』一八頁、朝倉書店、一九九六年
- (5) Isaacs, H. D.: An Encounter with Maimonides. 41-48 *in Ref.* (13)
- (6) Goodhill, V.: Maimonides-Modern Medical Relevance. *Tr. Am. Acad. Opth. & Otol.*, 75: 463-491, 1971
- (7) Lieber, E.: Galen: Physician as philosopher. *Maimonides: Philosopher as physician. Bull. Hist. Med.* 53 (2): 268-285, 1979
- (8) Moses Maimonides, transl. and ed. by Rosner, F. & Muntner, S.: The Medical Aphorisms of Moses Maimonides. Vols. I & II. KTAV Publ. House and Yeshiva University Press, 1973
- (9) Moses Maimonides, transl. and ed. by Muntner, S.: The Medical Writings of Moses Maimonides, Vol. I, Treatise

- on Asthma. J. B. Lippincott Co., 1963
- (9.8) Ibid. 95p.
- (9.9) Ibid. 71p.
- (10) Moses Maimonides, transl. and ed. by Muntner, S. : The Medical Writings of Moses Maimonides, Vol. II, Treatise on Poisons and Their Antidotes. J. B. Lippincott Co., 1966
- (11) Moses Maimonides, transl. and ed. by Rosner, F. & Muntner, S. : The Medical Writings of Moses Maimonides, Vol. III, Treatise on Hemorrhoids•Medical Answers (Responsa). J. B. Lippincott Co., 1969
- (12) Moses Maimonides, transl. by Friedländer, M. : The Guide for the Perplexed. Dover Publications, Inc., New York, a new paperbound edition of the first publication in 1956 (Original : Routledge & Kegan Paul Ltd., 1881 and 1904)
- (12.8) Ibid. 164p.
- (13) Rosner, F. et al. (ed.) : Moses Maimonides, Physician, Scientist, and Philosopher. Jason Aronson Inc., Northvale, New Jersey and London, 1993
- (14) Friedenwald, H. : Jewish Luminaries in Medical History. KTAV Publ. House, 1967 (Original : The Johns Hopkins Press, 1946)
- (15) Friedenwald, H. : The Jews and Medicine, Vol. I. KTAV Publ. House, 1967, (Original : The Johns Hopkins Press, 1944)
- (16) Kagan, S. R. : Jewish Medicine. Medico-Historical Press, Boston' 1952
- (17) Wüstenfeld, F. : Geschichte der Arabischen Aerzte und Naturforscher. Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1963 (Original : 1840, Göttingen)
- (18) Leclerc, L. : Histoire de la Médecine Arabe. Burt Franklin, New York, 1970 (Original : 1876, Paris)
- (19) Levin, A. L. : Vision, a biography of Harry Friedenwald. The Jewish Publication Society of America, Philadelphia, 1964
- (20) Rosen, G. : Harry Friedenwald (1864-1950) ; Physician, Bibliophile, Historian. ix-xix *in* Ref. (15)
- (21) Friedenwald, H. : Moses Maimonides the Physician. 19-216 *in* Ref. (15)

- (22) Friedenwald, H.: Jewish Luminaries in Medical History. 1-24 *in* Ref. (14)
- (23) Translators' Introduction. 9-15 *in* Ref. (8)
- (24) Fishbein, M.: Maimonides the Physician. xvii-xxii *in* Ref. (9)
- (25) Schimmel, S.: The Life and Works of Moses Maimonides. xvii-xxix *in* Ref. (10)
- (26) Gershenfeld, L.: Moses Maimonides-Physician and Author of Medical Works. J. Am. Pharm. Assoc., 25 (5): 440-447, 1936
- (27) Barr, S. E.: Moses Maimonides. N. E. J. Med., 250 (18): 779-780, 1954
- (28) Rosner, F.: Moses Maimonides (1135-1204). Ann. Intern. Med., 62 (1): 372-375, 1965
- (29) Rosner, F.: Moses Maimonides the Physician. 3-12 *in* Ref. (13)
- (30) Rosner, F.: Moses Maimonides the Physician: A bibliography. Bull. Hist. Med., 43 (3): 221-235, 1969
- (31) Schwarz, H.: Maimonides (1135-1204). Invest. Urol. 7 (5): 448-450, 1970
- (32) Benater, S. R.: Maimonides, the Physician — 1135-1204. South Afr. Med. J., 69: 255-257, 1986
- (33) The New Encyclopaedia Britannica. Vol. 7, 707-708, Encyclopaedia Britannica Inc., Chicago, 1992
- (34) 松本耿郎『流浪のユダヤ哲学者マイモニデス』『週刊朝日百科世界の歴史四八、十二世紀の世界』三〇二—三〇三頁、朝日新聞社、一九八九年
- (35) Rosner, F.: Medical Writings of Moses Maimonides. N. Y. State J. Med., 73 (17): 2185-2190, 1973
- (36) Rosner, F.: Medical Writings of Moses Maimonides. N. Y. State J. Med., 87 (12): 656-661, 1987
- (37) Lieber, E.: The Medical Works of Maimonides: A Reappraisal. 13-24 *in* Ref. (13)
- (38) 泉 彪之助『マイモニデスの銅像・墓・ホフライ語表記』『日本医史学雑誌』四二卷三号、一九九六年
- (39) 滝川義人『ユダヤを知る事典』、東京堂出版、一九九六年
- (40) リリアーナ・トレヴェス・アルカライ著、谷口勇訳『セフマラード』、而立書房、一九九六年
- (41) Catalogue of works bearing on the subject of the Jews and medicine from the private library of Harry Friedenwald (フリーデントウオード・ユダヤ医学史蔵書目録) 25-197 *in* Ref. (14)

- (42) 『岩波西洋人名辞典増補版』、岩波書店、一九九二年
- (43) Rosner, F.: Moses Maimonides: Correcting Two Misconceptions. *The Mount Sinai J. Med.*, 62 (2): 165-166, 1995
- (44) Fischer, I.: Der Arzt Maimonides, einer der grössten Philosophen aller Zeiten. *Wien. Med. Wchnschr.*, 14: 394, 15: 419-422, 1935
- (45) Kontorowitch, E.: Der Arzt Maimonides (geb. 1135-ges. 1204). *Schweiz. med. Wchnschr.*, 33: 751, 1935
- (46) 余部福三『イスラム全史』、勁草書房、一九九一年
- (47) W. M. ワット著、黒田寿郎・柏木英彦訳『イスラム・スペイン』、岩波書店、一九七六年
- (48) 余部福三『アラブとしてのスペイン』、第三書館、一九九二年
- (49) フィリップ・K・ヒッティ著、岩永博訳『アラブの歴史(上)・(下)』、講談社学術文庫、一九九三年
- (50) Lain Entralgo, P.: *Historia de la Medicina, Ediciones Cientificas y Técnicas, S. A., Barcelona, 1994*
- (51) *The New Encyclopaedia Britannica. Vol. 6, 226, Encyclopaedia Britannica Inc., Chicago, 1992*
- (52) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤(上)』、一二八、一三七頁、岩波書店、一九七七年
- (53) 『望遠郷7 モロッコ』、二一八頁、ガリマール・同朋舎、京都、一九九五年
- (54) 米山俊直『モロッコの迷宮都市フェス』、平凡社、一九九六年
- (55) R. Eleazar Askari of Safed: *Sefer Haredim, cited by Ref. (2)*
- (56) アミン・マアルーフ著、牟田口義郎・新川雅子訳『アラブが見た十字軍』、リプロポート、一九八六年
- (57) 泉 彪之助『エルサレムの聖ヨハネ騎士団病院』、『医譚』復刊七二号、一九九七年
- (58) 橋口倫介『十字軍騎士団』、講談社学術文庫、一九九四年
- (59) 塩野七生『ロードス島攻防記』、新潮社、一九八五年
- (60) 牟田口義郎『カイロ』、一五五、一六〇頁、文芸春秋社、一九九二年
- (61) 佐藤次高『イスラムの「英雄」サラディン』、講談社現代選書メチエ、一九九六年
- (62) 佐藤次高『マムルーク異教の世界からきたイスラムの支配者たち』、一一一―一二七頁、東京大学出版会、一九九一年
- (63) 亀井孝他編『言語学大辞典』、第四卷、世界言語編(下―2)』、八九五頁、三省堂、一九九二年

- (64) 前嶋信次『アラビアの医療』、平凡社、一九九六年
- (65) Friedenwald, H.: Use of the Hebrew Language in Medical Literature. 146-180 *in* Ref. (15)
- (66) Meyerhof, M.: Essays on Maimonides. Columbia University Press, 1941. cited by Ref. (14)
- (67) 石田友雄『ユダヤ教史』、山川書店、一九九二年
- (68) マルサ・モリスン、ステイーヴン・F・ブラウン著、秦剛平訳『ユダヤ教』、青土社、一九九四年
- (69) 『ユダヤ教の本』、五七頁、一二二頁、学習研究社、一九九五年
- (70) エリー・ケドゥリー編、関哲行ら訳『スペインのユダヤ人』五七―六一頁、平凡社、一九九五年
- (71) H・H・ベンサソン著、村岡崇光訳『ユダヤ民族史3、中世篇I』、六興出版、一九七七年
- (72) 山下肇『ドイツ・ユダヤ精神史』六二―九二頁、講談社学術文庫、一九九五年
- (73) 上田和夫『イディッシュ文化』一六五、一六七、二〇三頁、三省堂、一九九六年
- (74) Archivath, K. S. u. Distel, Th.: Gebet eines jüdischen Arztes im 12. Jahrhundert. Deutsch med. Wechschr., 28 : 580, 1902
- (75) Bogen, E.: The Daily Prayer of a Physician. JAMA, 92 : 2128, 1929
- (76) 井筒俊彦訳『コーラン(上、中、下)』、岩波文庫、一九九六年
- (77) 東潔『スペイン歴史紀行―レコンキスタ』、振学出版、一九九二年
- (78) 羽田正『モスクが語るイスラム史』、中公新書、一九九四年
- (79) H・シツパーゲス著、大橋博司他訳『中世の医学』一〇六頁、人文書院、一九八九年
- (80) 藤本勝次『マホメット』、中公新書、一九九五年
- (81) ロバート・セント・ジョン著、島野信宏訳『不屈のユダヤ魂』、ミルトス、一九八八年
- (82) 本田孝一『アラビア語の入門』五九頁、白水社、一九九五年
- (83) 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』、岩波書店、一九九三年
- (84) Osler, W.: Israel and Medicine, Address before the Jewish Historical Society, London, 1918, cited by Refs. (41) and (85)



- (58) Cushing, H.: *The Life of Sir William Osler*. Oxford University Press, 1940
- (86) エレーナ・ロメーロ・カステーヨ、ウリエル・マシーアス・カホーン著、那岐一堯訳『図説ユダヤ人の2000年、宗教・文化篇』、同朋舎出版、一九九六年
- (78) Goldberg, D. J. & Rayner, J. D.: *The Jewish People; their history and their religion*. Penguin Books, 1989
- (38) Letters of Maimonides to Rabbi Jehudah ibn Tibbon *in* *Miscellany of Hebrew Literature*, London, 1872, p. 219, cited by Ref. (41)
- (32) Friedenwald, H.: *Manuscript Copies of the Medical Works of Isaac Israeli*. 185-192 *in* Ref. (15)

(老人保健施設 陽翠の里)

# The Life of Moses Maimonides

by Hyonosuke IZUMI

Moses Maimonides, the most distinguished figure in medieval Judaism, had a career in the medical profession. His life is reviewed from the viewpoint of medical history.

Moses was born in Cordova, Spain in 1135. Because of the persecution by the Almohads, a fanatic Islamic sect, the family was forced to leave Cordova. They lived in Fez, Morocco for five years, and after a brief sojourn in Palestine, settled down in Fostat (Cairo), Egypt. In Fostat, along with his work as the religious and communal leader of the Jewish community, Moses practiced as a physician. He worked not only at home but also in the court of Saladin, the Islamic ruler of Egypt. Moses died in 1204, and was buried in Tiberia, Palestine.

His scholarly works are composed of ten books and treatises in medicine and three major writings and others in philosophy and theology. The saying in his epitaph, "From Moses till Moses there has been no Moses-like person", is a tribute of praise paid by the Jewish people to Moses Maimonides.